

# 創刊のことば

吉見孝夫

イソップの名はだれでも知っているよう。イソップ寓話の一つ二つは、それと認識しているかどうかはともかくとして、記憶しているに違いない。これほど私たちが幼い時から深く接してきたヨーロッパ文学を他に挙げることは難しいだろう。身近という点では、聖書もシェークスピアも負ける。

イソップが日本語にいかに深く入り込んでいるかは少し考えてみれば了解される。イソップ寓話に由来する「狼少年」という語は「繰り返して同じ嘘をつく人」(『日本国語大辞典』)という意味で多くの辞書に立項されている。既に日本語の語彙項目の一つになっているのである。お隣の国のことではあるが「太陽政策」というのがあった。これがイソップの「北風と太陽」から採った名付けと知れば、南の国が北の国にどういう姿勢で臨むのか日本人にもすぐさま理解できるはずだ。余り知られてはいないが「大山鳴動鼠一匹」ということわざの寓話はイソップにある。狼、狐、ライオン、こういった動物たちに抱く私たちのイメージはかなりのところイソップの影響を受けているということもできよう。

こう見ると、言語、文学、文化論の問題としてイソップを考えることの重要性が浮かび上がってくる。いや、そんなことは今更言うまでもないかもしれない。日本には400年以上前にイエズス会の『エソポのハブラス』が、続いて仮名草子の『伊曾保物語』が出版され、それらに関する研究は汗牛充棟と言ってもいいほどなのだから。

だが、イソップが日本に大きな影響を与えるのは幕末明治以降である。このころのこととなると渡部温の『通俗伊蘇普物語』ぐらいしか注目されていないように思われる。明治期のイソップ熱はすさまじいほどだと見ているが、取り上げられることは多くない。

イソップを研究するとなると、西洋古典学、日本語学、日本文学、日本文化論、教育史、国語教育史（イソップ寓話は国語教科書に多く採用された）、英語教育史（イソップ寓話集が英語教科書として使用された）など多くの研究領域からのアプローチが必要であり、事実なされてもいる。しかしそれぞれの分野の理解が共有されているとは言い難く、誤解も散見される。

イソップを調べていて、上記のような感想を抱いた。また、まだ資料自体が余り知られていない、知られていても基礎的な理解が得られていないと感ずることがあった。その欠を補う調査を進めたが、論文という形式には馴染みにくいものもある。そこでいつそ雑誌の形で公にしようと考へた結果がこの小冊である。既にISSNも取得した。イソップのことだけでどこまで続くかわからないが、2号で終わりたくないという意味で、まずは三号雑誌を目指したい。

ここには資料の基礎的な理解を深める調査、論考だけを掲載する予定でいる。それを利用、発展させた語学、文学などの論文は含めないつもりである。『イソップ資料』と題した所以である。当面は私の個人雑誌、私の研究室のゼミ雑誌の様相を呈するが、もとよりどなたにも開かれている。趣旨に沿う論考であれば、是非とも寄稿いただきたい。